昔の囲碁プログラムの棋譜紹介 (1991 年 Ing Cup)

清 愼一

1 はじめに

今日では各地でコンピュータ囲碁の大会が開催されているが、最初のコンピュータ囲碁の大会は、いつどこで開催されたのだろうか。

囲碁プログラム Go4++ の作者の Michael Reiss の WEB ページの中の http://www.reiss.demon.co.uk/webgo/ACORN.HTM によると、The Acornsoft Computer Go Championship という大会が最も古いらしい。1984 年 1 月に開催されたこの大会は 13 路盤の大会で 8 プログラムが参加したとある。

さらに、 http://www.usgo.org/computer/results.html によると、 1980 年代に開催された大会は表 1の通りである。

表 1: 1980 年代に開催されたコンピュータ囲碁大会

大会名称	第 1 回大会開催日
Acornsoft Championship	1984 年 1 月
USENIX Tournament	1984 年 6 月
Ing Cup(応氏杯)	1985 年
ヨーロッパ大会	1987 年
北アメリカ大会	1988 年
Computer Olympiad	1989 年

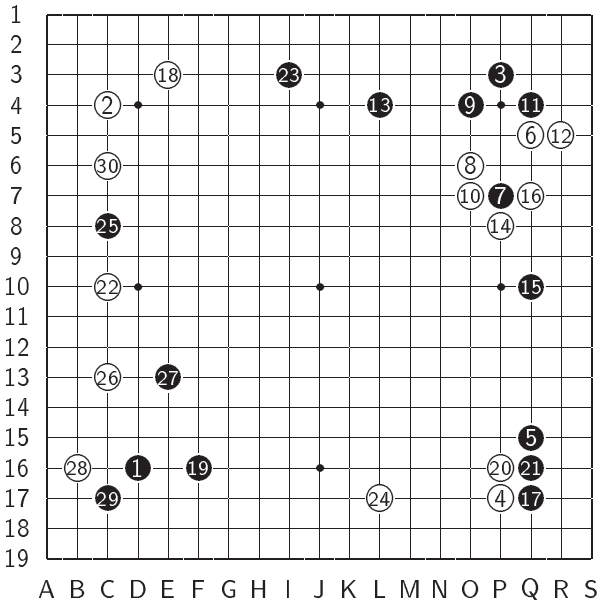
同じ WEB ページに大会のレポートや棋譜が載っていたが、大会結果と棋譜の内容 (プログラム名や勝敗) が食い違っていたり、終局まで棋譜に記録されていなかったりと、ちゃんと保存された棋譜はほとんど無かった。そこで本記事では、記録の内容が信用できそうな 1991 年の Ing Cup の上位のプログラムの棋譜を紹介したいと思う。

2 1991 年 Ing Cup

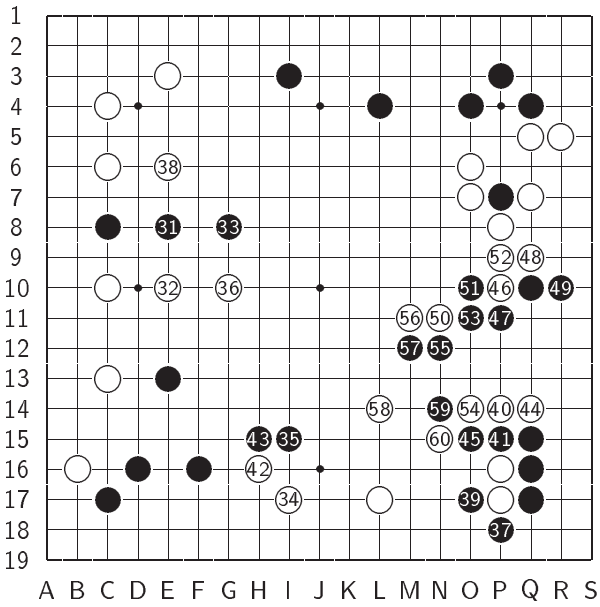
1991 年の Ing Cup の成績が http://www.reiss.demon.co.uk/webgo/ING91.HTM にあるので付録にも記しておく。優勝は 1989 年から 3 年連続優勝の Goliath。優勝の Goliath と 4 位の囲碁 III は、既に商品としても販売されていた。 3 位の Dragon は、 Macintosh 上で動く有名なフリーソフトだったと記憶している。

3　棋譜紹介

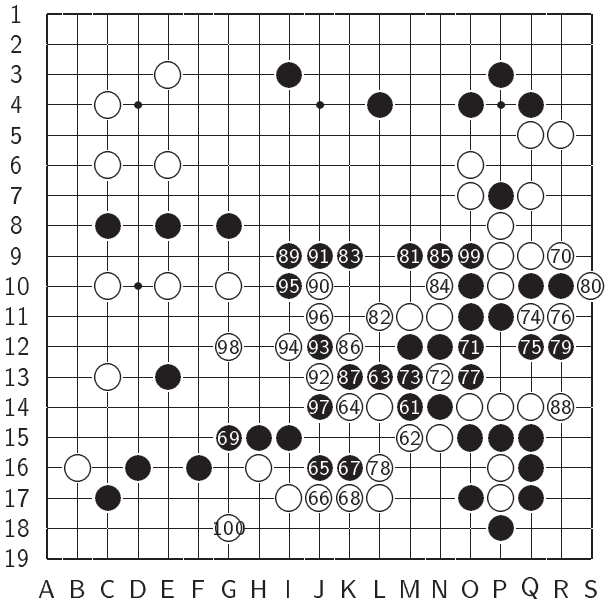
3.1　Goliath(1 位) 対 Go Intellect(2 位)



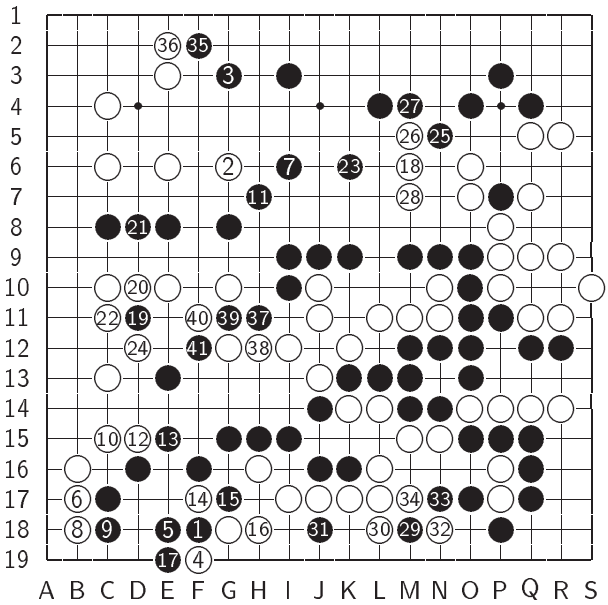
Goliath の黒番。
白 22 は右下を打ち続けるべきところだがソッポを向く。しかし、すぐに白 24 と右下に戻ったので、ヒラキの重要さはわかっているようだ。
その後は互いに大場を打ちあっていて、布石の基本はわかっているようだ。



白 38 は右下を抑えるところ。ここから急に弱さを露見する。白 40 は、白 2 子がゲタで取られないようにするために打ったのだろうが、黒 41 のアタリに白 42 と手を抜くというチグハグさ。しかし、白 44 と抑え、白 46 から右辺の黒を攻めていくところなどは、着眼点は悪くない。
ときどき大きな手抜きをしたり、スキが残る手も打つが、流れは十分囲碁っぽい。

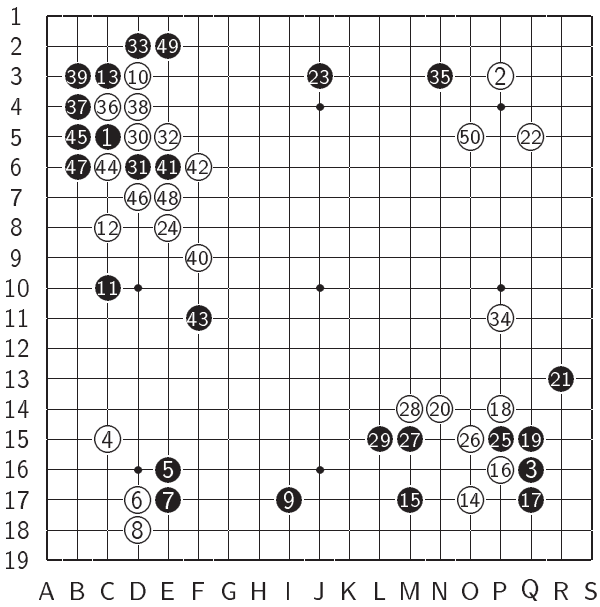


右辺で大きな戦いが続いている。
この間、両者ともにソッポを向かずに戦い続けているところは素晴らしい。
白 72 と眼を潰したり、白 84 とケイマをのぞきにいったり、白 88 と渡りを止めたりと、白は黒を取りにいこうとしているようすがうかがえる。だが、ちょっと無理。黒 99 とつながれて逃げられてしまう。

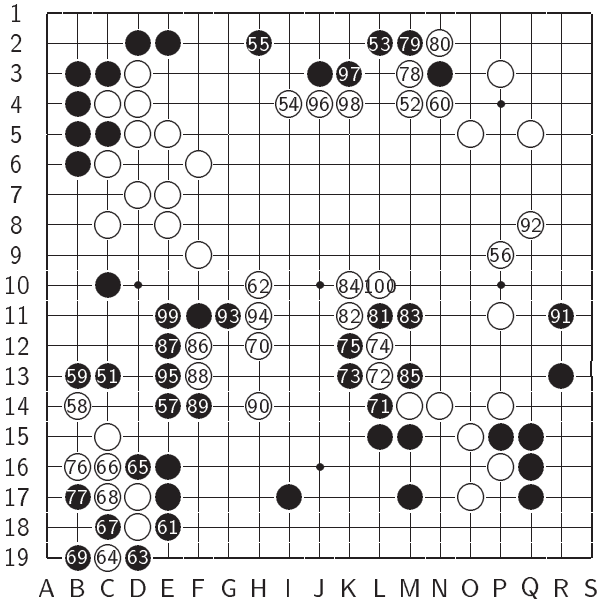


右辺が一段落したので大ヨセに入る。
黒 31 は中手のつもりだろうが、黒 29 の 1 子を取られて、白は難なく生きる。この程度の死活はわかっているようだ。
この後、黒 37 の両ノゾキから中央の白が分断されて死んでしまい、大差で黒が勝った。

3.2 Goliath(1 位) 対 Star of Poland(5 位)

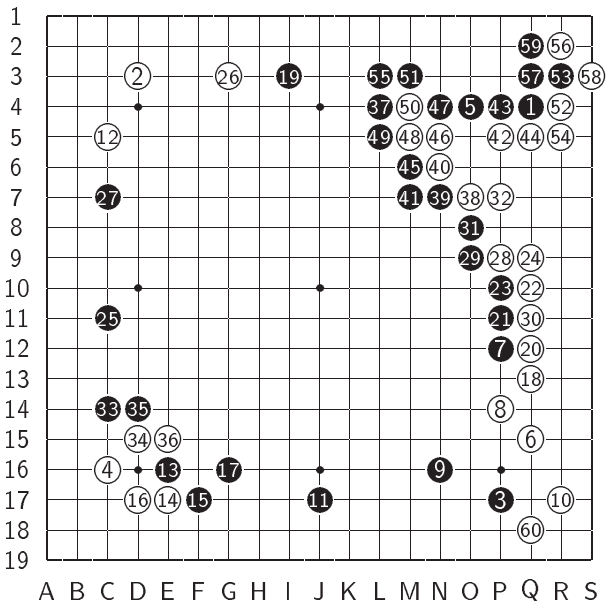


Goliath の黒番。
白 14 はソッポ。しかし黒も定石だからと付き合う。白 22 も左上に手を戻したいが黒も上辺に開くのを阻止するために付き合う。白 40 は何だかよくわからない手だが、黒 43 と付き合ってくれたおかげで、白 44 の切りから黒 2 子を取った。
基本がわかっていないようで、わかっているという感じの不思議な進行。

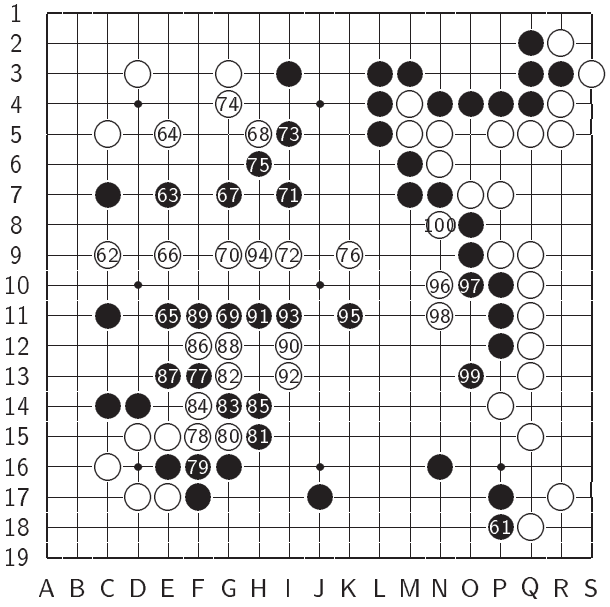


黒 53 は、単に受けると二間の接続が不完全だと思ったからだろう。初期のプログラムによくある打ち方。
黒 63 から左下隅を殺したのは見事。
白が正しく応対できなかったとは言え、スキを逃さず打つところは強いと思う。

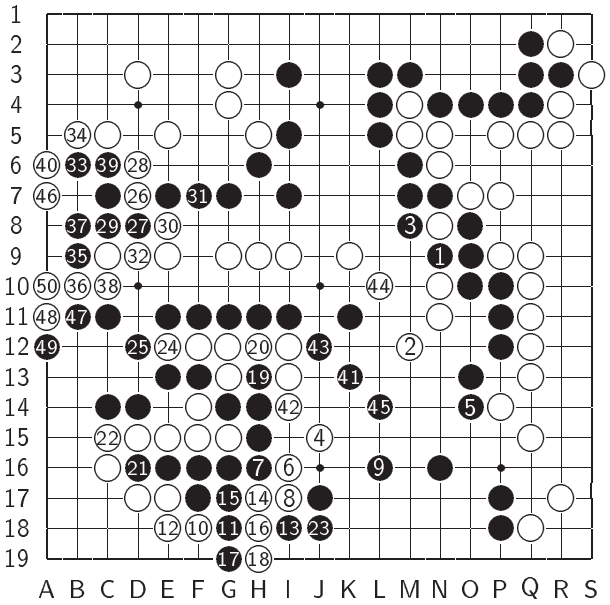
3.3 Goliath(1 位) 対 Dragon(3 位)



Dragon の黒番。
白 18 から白はどんどん地を作りにいく。黒に巨大な厚みを作らせて損をしていると思うが、当時のプログラムではこの厚みの認識は難し過ぎるか。しかし黒から見ると白に地を作らせないような手は打たずに、厚みを築いているのだから、厚みの価値を認識できているのかも。
白 56 のハサミツケのような手筋は知っているようだ。

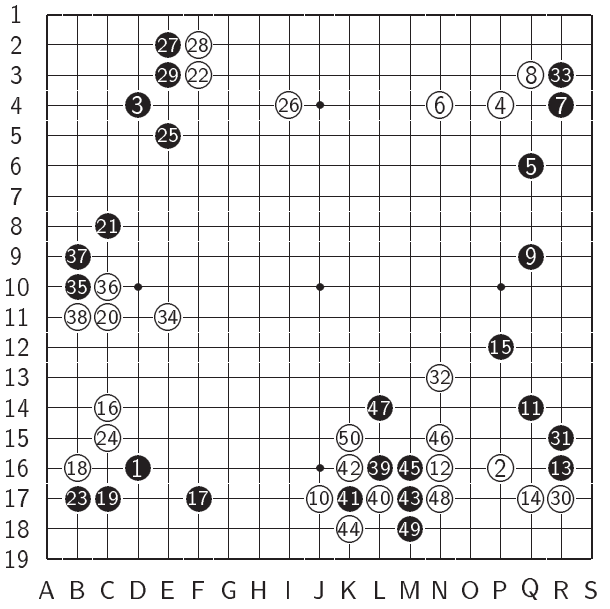


白 62 の打ち込みから逆襲。
黒 63 ~ 黒 71 まで一間トビで攻めるのは手緩い感じがするが、白は相変わらず苦しい。白 96、白 98 と効かしを打てるのは当時としてはすごいと思う。

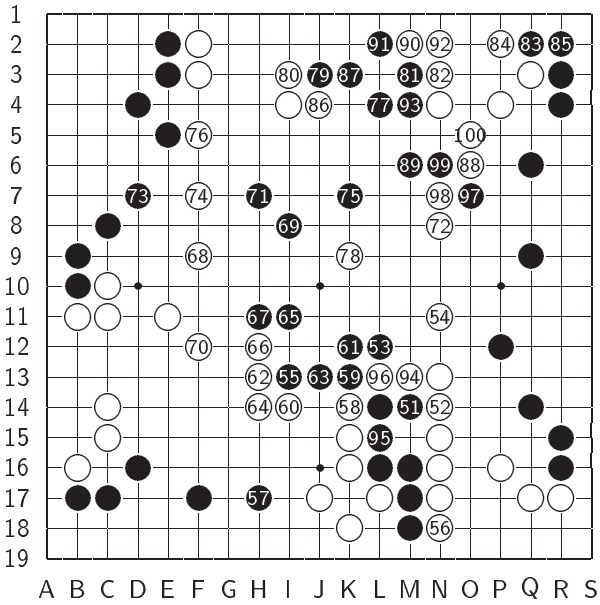


黒が優勢だったのがここで逆転する。
白 6 のノゾキから左下の黒が取られ、
白 26 の割り込みから左上の黒も取られ、
白が逆転。
白 56 右上隅のハサミツケ、白 96、白 98 の効かし、白 126 の割り込みなど、部分的な戦術で白が上回っていたようだ。

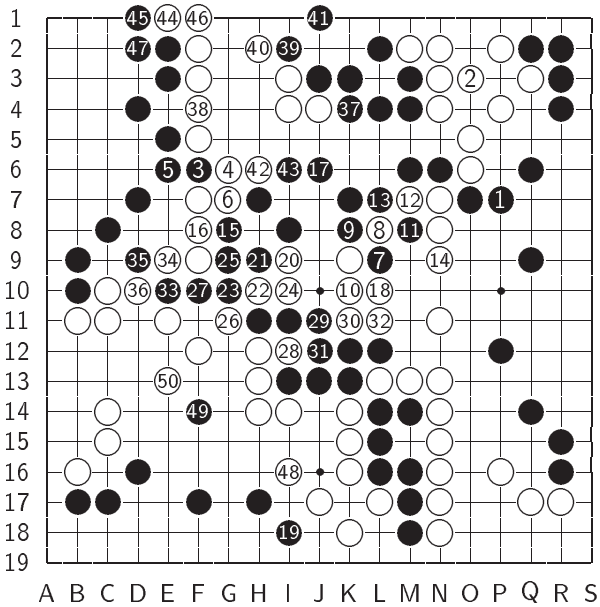
3.4 Dragon(3 位) 対 囲碁 III(4 位)



囲碁 III の黒番。
白 20 まで、まるでプロの棋譜を見ているかのようなきれいな進行。
両者、二線の手を打ち続け、そのままヨセに入るのかと思ったら、黒 39 から戦いが始まる。



黒 61 は意図がわからない。黒 71 も不明。バグだったのでしょうか?
白 94 ののぞきにつながなかった黒 95 が大悪手。すかさず、白 96 と黒 6 子が取られてしまう。黒 95 は、黒 4 子のダメを増やすことによって、黒 4 子を助けたと思っているのでしょう。



白 22 に黒 23 と受けたが、白 24 に両アタリしなかった理由は不明。両アタリの評価は難しいことはわかるが、前譜に続いて黒がボロボロ取られて逆転される。

4　全体の感想

上位の対戦を 4 局紹介した。10 年も前の大会の棋譜だが、上位のプログラムは、かなり囲碁らしい感じがする。定石も知っているし、定石はずれを打たれてもヒラキやツメが打てるし、厚みも作れるし、手筋も打てるし、簡単な死活も分かっている。10 年も前だからと言って侮れません。

でも、大きなところを手抜きしてソッポを向くところとか、わけのわからない手を打つところなどが、時々見受けられます。今のプログラムは序盤から石が接触するような厳しい打ち方をしますが、10 年前のプログラムの序盤は一間トビが多く、無難な進行が多い気がします。また、10 年前のプログラムはわかりやすい手は逃さずに打てるけれど、どこに着目すれば良いかが難しい局面での手が、今よりも劣っているように思えます。

私の主観ですが、今より 4,5 級弱く、6 ~ 10 級といったところでしょうか。

付録 (1991 年 Ing Cup の成績)

順位	勝数	プログラム	作者	国籍
1	6	Goliath	Mark Boon	Netherlands
2	5	Go Intellect	Ken Chen	USA
3	4	Dragon	TungYueh Liu	Taiwan
4	4	囲碁 III	実近 憲昭	日本
5	4	Star of Poland	Janusz Kraszek	Poland
6	3	Handtalk	ZhiXing Cheng	China
7	3	Stone	KuoYuan Kao	Taiwan
8	3	Modgo	Knoffle	Germany
9	3	Mac	Won-Ho Jee	Korea
10	3	Many Faces of Go	David Fotland	USA
11	2	Nemesis	Bruce Wilcox	USA
12	2	Hirartsuka	Shigyou	日本
13	1	Explorer	Martin Mueller	Switzerland
14	1	大本因坊	吉川竹四郎	日本
15	0	Go	Yuzhi Yang	China